序

「吾輩は猫である」は雑誌ホトトギスに連載した續き物である。固より纏つた話の筋を讀ませる普通の小説ではないから、どこで切つて一冊としても興味の上に於て左した影響のあらう筈がない。然し自分の考では少し書いた上で一と許り思つて居たが、書肆が頻りに催促をするのと、多忙で意の如く稿を續ぐ餘暇がないので、差し當り是丈を出版する事にした。

自分が既に雑誌へ出したものを再び單行本の体裁として公にする以上は其作物を公にする丈の價値があるとの意味に解釈されるかも知れぬ。吾輩は猫であるが果して幾丈の價値があるかは著者の分として言ふべき限りでないと思ふ。ただ自分の書いたものが自分の思ふ通り体裁で世の中へ出る事は内容の價値如何に関らず自分丈は嬉しい感じがする。自分に對しては此の上なき慰である。

此書を公にするに就て中村不折氏は數葉の挿画を寄せられた。橋口五葉氏は表紙其他の模様を意匠してくれた。両君の好意に因つて文章以外に一種の趣味を添へ得たのも余の深く傷とする所である。

自分が今迄「吾輩は猫である」を草しつゝあつた際、一面識もない人が時々書信又は絵端書抄をわざ〳〵寄せて意外の褒辞を賜はつたのがある。自分が書いたものが斯

十二ノ廿四（教員紙）

んふ見ずおらずの人うら同情を受けて居ると云ふを発見するのも非常に難有い。今出版の機を利用して是等の諸君に向つて一言感謝の意を表する。

此書は毫向もなく、構造もなく、尾頭の心元なき海鼠の様な文章であるうらたとい此一篇で消えてかくふつ[illegible]所で一向差しつかへない。実際消えてかくふつうである。然し特来帆中に罪を愉んで視の塵を吹れんのである。再び稿を続ぐ機会があらば稿を続ぐ積である。猫が生きて居る間は――猫が丈夫で居る間は――猫の条が向くと死は――余も亦筆を執らねばならぬ。

明治三十八年九月

夏目漱石

十二ノ廿四（赤紙巻）